細訂
增續

誹諧山乃井

坤

増續山井四季之詞下

秋

白蔵晏天　金商明景　爽籟

七月

ふみはき　ふつき　文ひろげ月（義正）七夕月は　とこ夏　七月は
涼月　孟秋　初秋　夷則　孟秋　相月　七夕月　文とり　ちり
ちり　ひろげ月　文月　文月　とも　いふ。○立秋　けさの秋　秋の
夷則は七月の律　菊月　紫秋　いふ。　初凡　肇秋

○餞暑（セン　シヨ）　朔日（ツイタチ）　○楸（ヒサギ）乃紫（ハ）ぶといふ　ちろ〳〵に立秋の日は
楸紫と雲を求てを
んなごわらべ　どちま〳〵　花のるうよきりのてい〳〵
事をー付と　名（爰華原）楸とぶらうを　秋るう。　○一葉

ひとすぢの舟　一説
い桐〻　書言注　○柳蕤　○桐　○楮　○揚燈　俗ハ　○掲行
茶と注ス人のまゝ　むる事〻
七月ゐまつりの月ゐれ　ゐざ〻

○小野田の水は六日社頃の燦　たきハ七月

○七夕　わさらびめ（りを）たき　ぬびめは　たくぬびめは　七夕　ぬびめは　ひこ星
星今　星祭　星の名　星の　星の　織り　織女　牛女は　牛　河　彼は
めさるゞ　俗　おさるゞ　ハ　二の星　牽牛　宣来　イヌカヒボシ
いぬひゞ　とよめり　わをるゝ　やと　ととヽ　七夕　日本紀　とり書
ち川　銀河　銀河　銀漢　星河
星今の関　セミアリ星の名　赤〻

○年の渡　一年　一度　おわやの
川を　ゐる　ゐ〻
とりに逢
もいつ〻

○書むゝ　舟　たゝ　ゐる舟　ゐる舟　ゐる舟

るあるを星の納受乃事〳〵とかり太うを星に名事をとみと
器とあり〳〵一ゝを星に願をこひてこの事をこといて
○乞巧針（キツカウシン）をうこれぬ人七孔の針をいろ〳〵れ糸を
とりてたむく示宇あり 荊楚歳時記
○七箇池（シチカイケ）星をまつるに七つのゝこゝろあるとつれて歳
とつけて星の数をこうちをいてり
○梶（カヂ）乃葉○芋（イモ）は葉の露 俗に七夕供物
双よ宿て梶よ をまつる芋の葉乃露
おこ葉吉 ○七日の虫干 内侍司より氏と
餅（ヘイ）むかし〳〵 言辛氏の小ま七月七日に死り生返とあり人よ
疫病（ヤクビヤウ）とあるを 生者つゝよ餅をこりを放よこを死
日にあるまて素餅をとりをこ へ疫病をまぬるゝ〳〵 節記
よあり今い素麺をとりちあ 切生供あるを

○洒涙雨（セイルイウ） 七日の夜〜六日の夜い 俗に洗車雨と云（津文）○本市川流の義太夫
七日茅をとりて色〳〵 乃仏和を立なを
○乞巧奠（きこうでん）井家七夕の鞠は○逆の
巻手入は本山に七日 嵯山に八日 ○文殊会（モンジユエ） 八日ちかちにて 紀久津根源 ○六道
魂は九日建仁寺の南よあり 昔堂冥金よかひめるれ
を冥金のみちと云て 墨灵むこよ 都くまり 陸つく津あり
○精霊は 乞六乃に〳〵て〳〵 宝ものてきて
むとろる 宝およこてき 作り ○清水寺
日俗（ニウテ）十日 俳 ○中元（チウゲンジツ）日 十五日の津〳〵
中えを苦る ○盂蘭盆（うらぼん） 盆供
施餓鬼目蓮の母餓鬼の中よわりて食を所津と仏を佛うらぼん
とるさ〜め七月十五日百味五菓ととを〳〵十方の佛よ供表せ〳〵

の人い母御より食を授けうきくに目蓮仏よりまくさく仏中の孝
順をおこなひ給へるものいやさにうら盆をなさくしといふ仏法とのの
ちてこれよりこうらんぼん。○**玉まつり** 霊魂棚 仏棚 鐘は
おこなひ盂蘭盆 みそ萩は 桂かめは
桂さけは根芋は きそべ ひさこ瓢は 仏なるをひるは麻がら
なきくの世よりきすす 年中行事 新思絵よみくうり
中も七月いらうらんまあれい一人のよまつり 供物 素麺 十五
日は地官尼人の苦悪を分別する日にて五穀日は絵とよこ法
の供おとそうまつりて法大聖元またてうりて 鐵瓶のうるこ
をきくよ 年文 新思絵より十四日の夕内よりて
十六日午はよ 供物 ○**墓まいり** 仏七月初先祖の墓よまいりこれ
はて七月十五日は先祖の墳乃城外まあるをと
紀伝め供養するよ 菱華孫まうら ○**生身玉** 仏墓
の飯 仏

さ一銭 仏世よ父母ありるくい生身おとていまひ供物みたるくて
も墓の飯さぐるどあひとうばのつぼの事あり
○**燈** 灯籠ともきりとうろ仏ろはまひうろは花
燈 灯炉はうげ灯炉は 禁中も庭ろあり 五庭門法
うえ供物 ○**かぎ躍** 仏小町とうりはきそをうりは八セ
とうはたいもとうは松が浦ぶ ○**三井**
寺に女の踊 仏十五日よのつぼい女人まうて ○**送火** 仏十六日 施火
ぶうりうるし供物 たきは山くのとうり火は志ぐ谷い ○**八幡安居**
大文字 松ろ陰いぬ法ゐどあり 日ゑ形心静 **経** 日安要期 ○**解夏**
中信日居 釈氏要覧よあり 極越よとるとといと釈氏要
説よあり ふい吉祥草 ○**花火** 仏 ○**水くけ草**

説こゝろ貞徳云水敷草ハ多くハ七夕によめり爲草ハ稲の事又
或説よみそハぎゝ爲草のゝ爲草のゝ爲草云く

○地蔵祭（チザウマツリ）俗廿四日 壬生六地蔵ゝ童の灯炬ゝ作り○こちやる祭
貞徳云廿七日こゝみさ山物も出所の事ゝ爲るゝ爲るゝ爲るゝ爲るゝ爲るゝ爲るゝ

○御霊祭（ゴリヤウマツリ）法生（ライデ）十八日 八所の霊ゝ世遠問答ゝ

○相撲（スヒ）ことゝ俗ひ（万葉）臺（ウテナ）お撲（公事）ハ出雲国の俗ゝ
国の供法乃人とめ ありめて七月ゝお撲の神（ヤケ）と
いひく天子の出給る事ゝ万葉ゝお撲仕と事てゝ
ひとゝ武ゝ法乃ゝ法乃ゝとめ出仕ゝ年中行事
公（公事）寛平七年に臺お撲を出給ゝ（公事）季の御堂ゝお
撲の松ゝ爲る事ゝ七月のおやけ事ゝけ生ばなるゝ今

の世ハいつゝすまひ ハ彼れとお
まるゝて ハ辻すまひ ゝ云ても秋ゝ月ゝ

○雲鬢（ウヘ）ゝ髪 陸の髪 袖の髪 ○三勢
髪の風 書て笹 胸乃髪 書ゝ人 ○稲書（イナツ）ゝ
きりゝさめ 目ゝきりゝさぐる の俗 ○のこ
暑さ ○初暑 ○冠（カムム）ゝ入 冠にし
てく 園 ○木槿（ムクゲ）日令ニハ夜ゝ
の俗 ○草花 ○ところ
一し（ヨウウ）ゝ女帝 ゝ ゝ俗 ○朝顔（アサガホ）
弾 鹿（シカ）ゝ子（ナツサ）
ゝ枝 ゝ 異名 ○廿秋 萩の戸 禁中萩ある
ゝ ゝ俗 ○らふ 白菜 俗
○蓋ぐゝ 紫の一名ゝ又花紫ゝ咲て ○芭蕉（バセウ） ○小車（ラグルマ）の
細き ゝ ゝ別

花仏○きちかう仏桔梗（キキヤウ）あり○犬子草（エノコ）は○荻（ちぐさ おぎ）のひふき

萩の上風 貞法云いせの濱萩い芦けるあれい新こ
極をむちへべ也秋ろ〜ト萩 彩塔乃萩

花仏おとこへし花のあり古をこ見しに似てきふと〜花〜
ろし 袖中おおおとこをこるの花咲とゆ奇あり

○すまひ草は相撲よせて ○仙花花仏紅梅草（コウバイ千仏）仙花也こ ○サ草（ヤク）
家にもよめり

作草（サウ）は才切草（ライトギリ草）は ○歌（ハミ）言草（ヨンングサ）は秋也ちきこの物こ ○おきる草は
奪のこ〜こ

茄子あるこ草の色白し ○まんぢゅけは ○菖蒲草（サウ）は
紀言草に似て花あり

めちき草 ○こまつが花は ○やいと花は ○なさま花は

○蓮のこ花は ○絲瓜（ヘチ）は ○樝（モ）の實は ○木瓜（ボケ）は

○樓（エンジュ）乃これは ○蜀漆（サギ）の花は ○早田（ワセ）（ワリダ） ○むろけ花

ゆ也 貞法云ちての井よ
をでこのこと〜ふこ ○ふるる蚊 ○蜩（ヒグラシ） せこを法ひて夕こ
をむちひて秋ろ

○秋の胡蝶 てよよ言と
法ひてを ○秋の螢 螢よ言と
法ひて秋こ ○松

虫（くまつ虫） ○蛬虫 ○蟋蟀（キリ〜ス） つつこ
とゆ言の乃こ ○きりとりきりとり虫

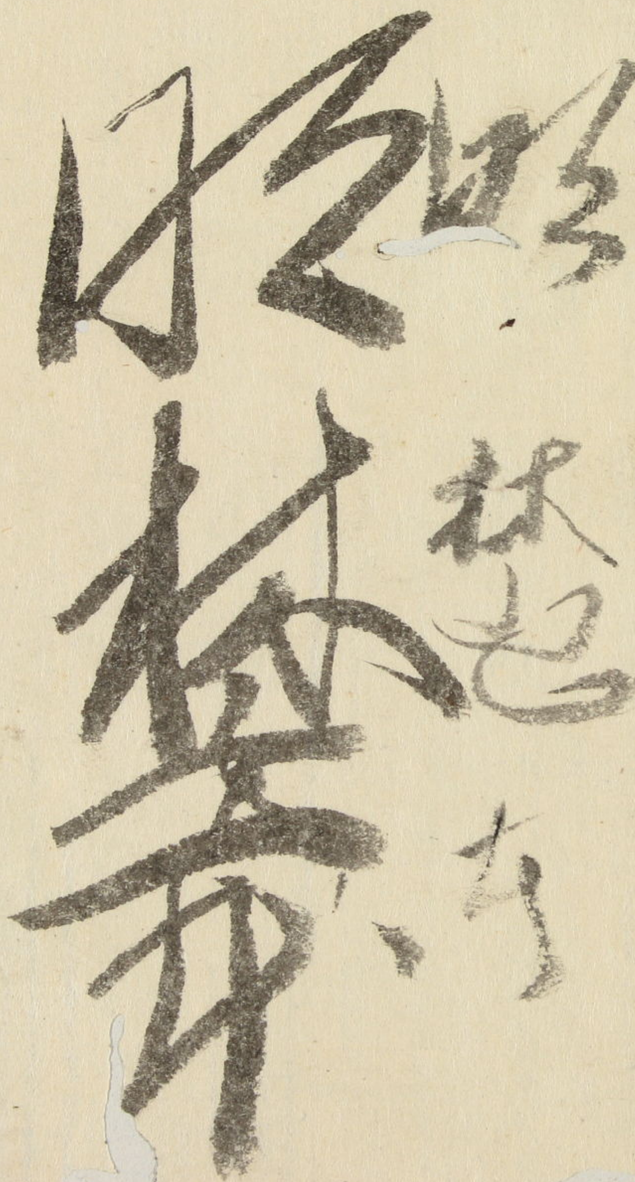
○ゆ月こ虫仏 ○いぼむし蟾蜍（カヘキリ） 仏（タウラウ） ○蠹（モ）こ住虫乃

言（こ）鳴 我ろ〜い雅こ虫
ろとい〜こ秋こ ○虫虫仏むしこは全虫はいこ〜は
こ〜ふき寒蛩（月令）このむ〜ろ

貞徳云蓑虫と斗い就こ呼ぶ公あるは秋こ季に詠る古き連歌
に柳の芯ぐさきこる蓑虫といへい秋よかきるぶ就といふ孔ちこ
枕双紙に秋風ふけい父恋しとるくとこて ○いなこ ○いる虫
呼ぶあるは秋ちるるるよちろや
田虫
なる ○ 蝗（イナゴ） ○ 蟲暑（ショノ）節 七月中こ ○ 鷹鳥（タカ上リ）を祭る 今ハ

○ 鷹屋出乃鷹 ○ 鷹山別 ○ 初鷹 或八月 ○ 初
鳥狩 は貞徳云鷹屋出の鷹とい初てつるを初鷹とも初鷹狩
ともいふこと屋出のたちは夜ねのぬけるを鷹屋
こめて飼て初乃出てそひしるを金の皇灵乃巣を
ちりてしる巣より出るにより巣鷹といふ ○ 鳩吹（ハト）
神中およ山鳩ハ秋ちりにるけば人鳩のまゐとして手と合せて鳩のこゑ
乃やうに吹るをなり是鳩を手をためとそ鷹とふためとも云

○ひやむぎ 他あり麦は ○やきどめは



八月 なつき 秋風月（長月）月又は仲秋 南呂 壯月 中律
桂月 木の葉やうく色つく故月といふ 南呂八
月の律 ○八朔 さのむ乃祝ひ 俗云 ほ 俗縁のみなどを交
まぜるにふぎに登宮ひ〳〵名をのひ〳〵に出て結ありて日
出ぼ出あり乃るとうやみ後深草院の建長の比よりもてはやされ
いつ〳〵めいのことて米と柳樽おくるといきて
あひとう出て（公家）今い紙袋に菓を入て送る ○白露
の節 八月の節 ○天中乃節 八月一日 七月盆の生魚乃
方れおときりて炭焼きて
八月朝日天中節 赤口白吾値節 滅と出て門ふとせい火紙望
高口吾乃災をまぬるとよ 於茨木世清宮者ゑどあり
○水村祭 俗一日二日 堺の大ち ○堺天神祭 俗三日四日 指は
のうわとも

○加野祭 四日 苔い出祭の日 茨木宿ふ神
氏参りて枇杷を立て神ふ供せ ○白髮
乃開帳 俗五日山門の俗下り
て事を行とて ○敦賀祭 俗
十日 ○つら
さ石 十一日 三井根保定考これ 四日 椹陽巷のくを撰出て
乃ふ宮仕とく京官の六位以上のくを立て藝祇紙を撰
て栄爵と為ふ出
出ぐさ者とい ○いとあるとき
老四手九月吳出より吾乃とうぐんと世ー時大菩薩の神カ
ようて敬を出て好戦よおのくのくところせし放生会と紙ぎ
論宣をとるも毎年法出ても出るのありと云て世清宮者
吳宮六放生川にてあるもくるを出し放生川とだうい秋ふ
○河野乃津の八幡祭十五日 伊勢 ○志賀八幡祭 日

○豊浦祭（ヨウラ）は日本門（ホンモン）○宇佐（ウサ）は日○箱崎（ハコザキ）祭は日

○名月（メイゲツ）名づるき月。こよひの月。芋名月。仲秋月。端正月（韓昌黎詩）月の名。俗なりとて。月のさやうさやけきを。小望月。俗十四夜と云。十五夜と望月といへり。三ケ月。十六夜（イザヨイ）の月。たちまち。俗の月十七夜と云。居待の月十八夜。ふまちの月十九夜。月の弓。弓張月。月弓の名。（日本記）上弦下弦のわどと弓とを云。月のうぶみ。俗月を云。月乃名。俗月のこと。月のみこれ月を云。月の桂は玉兎。月中より出の名を云。月の桂は玉兎。月中より出の誰ありといつて。月中より出の名を仙女と云。仙女を嫦娥（ジョウガ）。嫦娥これ仙女の名。仙女を嫦娥。月中より出の名。月の桂。月中より出る女。月の桂。桂男。桂男。劉とゝふ仙人。月中桂あり。と酉陽雜俎。桂男。桂男。月の桂。俗ある人。穴をおちいりてわづらひ。月の桂。桂男。桂男。月の桂。月の桂。桂男。月の桂。月の桂。月の桂

いなひしゝこの祭いにしへよりすたれさりしを世清四春まゐり
始まりにとうの鼻とゆゑのわゝまるは桔田長るゝ一説に
鼻言うゝしす日本紀よりも ○栗名祭 十八日 俗 ○塚の枝祭 俗へびの穴入は
○秋分の節 八日中心 ○初雁 ○菊花の人 俗
牧馬の月に褐速の社とてあり苦い毎年八月よりて来てまゐりそい
古へ刑アのつゝさ彩獄刑法をつゝ名五刑とたゝ名りを死刑の去の巨
名よまゝまゝと織系物の ○釋奠 上丁日先師孔子十哲と
ほよあり褐速一説に千八やと陵り まゐり二月よれるし
○秋社 秋分のおほよ近き戊日に五穀の神とまる日に五穀五色
の土と対して社として候と蓮と禹貢の巨よあり
大ゝゝ夫 ○彼岸 貞姫云秋の色と深
よおゝ 生死生死の神あり ○秋の言中文の

一説にかまつかのおとは云〻梳芽殘よ
かまつかの葉形のまるとまとつて○こるぎ 俗沢桔梗○う
つゝ芽は○あもび（タデ）は○蓼の毒は穂ゝでは○猪牙（ウキヤウ）
持ゝは○かゝも瓜は○つき○冬瓜（カモウリ）は○半房（ホウ）ひ〻は
○芋（イモ）いものらきぞいき○芋（クヽリ）ぬうどは○芋るは○かゝやゝは○き綿（ワタトル）を
ゝゝゝ俗○わらたゞゝは○ゝつきは○芋程（タヽ）まゝは大根
のたゝはかしたはき
けーまゝまびき芽○夜ゝ川 俗四まゝぬきぬゝゝ○蒟蒻（ウツラ）
ゝゝ俗あやまゝきは
所ゝゝゝ

○鶺鴒　鶺鴒とる事あり　仮　○鶯歩　あるたう　くいたり　○かじか

○すびあ　西美能　○下里篠　簫　麻　うやぎ　さぐる

呼　小男鹿　鹿　笛　俗　鹿笛

○初鮭　初鮭　仮　○紅　鮭　同或くちめ鮭といひて秋の季こと

○小鰯引　仮ひ　こつる　秋　○鰹　鰹　鰹　鰹　鰹

八月　大汐の　○田と雁　田をつく　田を刈　○稲穂　稲穂　穂穂　穂穂

○稲莚　莚　莚云莚と云きこと　又和名抄に稲の西の年くとあるとは

よい秋てうくはよい二句きらよへしいるむ　石川そひ　柳とよめるそ

わう　柳のなびきまるがいを莚の中　あるとい事　こ　い秋よ

あるとも　あるくし　○紫山　ぐ　山　ぐ　おとし　○そうば　○引板　引板

○かるこ　かるこ　ハ　ぐ　おどしの人形　そうばハ　原名　水鳥よ

出て　あの力と　原て　書と　出を　麻おどし　引板

い板よ　木と　て　繰ひきて　ものこ　ものよ　ものつ　ものの　事あり

かるこ　とそうばい　ぬ　ぬ　出て　そうば　と　俗　都

よそて　そうば　乃人形　と　公　て　古　事　と

る事　おし　出て　実い　別の　ものあり　先年　石川　山　人

門外よ　そうば　作て　文　小　焼　と　て　事に

四う　る事　作　設よ　但　て　答　作　焼　と　作とし

九月

九月 なが日 和歌月（長歌）小四月日は祝月日は木末の秋
季秋 無雨 玄日 菊日 俗 素秋 晩秋 初乃
ながき月あれどなが月といひて木末の秋といひ紅葉ちゆくこと
又末の秋とも云 末月ともいひて 雨いと九月の俳し 雨
又い雨 ○御灯 三日 三月のとく小斗より 灯をもらるる所と宋し公事
ともいへり ○不堪田 ○桂
蓼 七日 菊い法 玉代田の接 亡き人の
まれびとにつきて祖霊と魂と共に降ると公事
宮相撲 八日 ちくのこやく六条の小 ○泉涌寺舎利
酉の日 度の酉一町 （於茨）
會 同日 世尊入滅 ひ 疾 ○
に韋 遠天 ○
を舎 武 て 日
たげ せ 作り

○重陽 力 宴 重九 菊酒 葉萸の蠟
菊花の宴 菊花の

九月の九日 菊の花を綿 九月の九日あれば重九とも
重陽ともいひ おひやけ ふむ 探 勅 作り文 ○ 事 作り 法
帳の左右 葉萸の囊 菊 菊 菊酒 作る 事
みどりとこれと 宴 菊の宮 ともいひ（公事）菊 菊の
酒と用ひ葉萸のちくとくる事 昔 費 ぶ 世南の 永にと
枚事 （事文 ） 又 葉萸の房 と 作て 法 かざ は 気 を除き
初 と 菊 菊 作る 風土記 ある 花 の 花 九日 九日
い 宴 酒 ちひ 身 わる 酒 と の め ば 病 を 作る
酒 と わ め て 用る わ （世説 問答） 又 き に 粥 と き る 事 い
つの 此 と 事 事 作る 花 み 作る 只 菊 と て わ そ ぶ わ ま り 事 を
と 作 せ ん と の こ ろ さ 作る （世説 問答） 作る 菊 と て も 作
を 事 ま ろ こ ま ま い 菓 の 糕 と 作 作る 菊 と 加 （作る 事 器 時
新記 ま あ り も ○醍醐祭 九日 能 あり ○香花 菊
木 の 枝 ま や 俗

祭は日伏見にあり○鞦馬祭は日○岩布
神功皇后を祭る○生玉は日他 大坂稲荷の○四宮祭十日 大坂○下
祭は日他
○多田祭十日 豊他○例幣十一日伊勢太神宮へ法幣を多毎年の事なりて
例幣といへども事根原なり○住吉相撲舎十三日 於茨
多吉田も例幣使あり○住吉乃市は日宮の市と云これ神輿とりきつも神宮他
なし神宴を多とりつづく他法あり宮幣を
○住吉乃市は日宮の市と云これ神輿とりきつも神宮他
なし神宴を多とりつづく他法あり宮幣を
て倚子をとりて法事をも他
多神を賞すと事を他
名月まめ名月他 栗名月は九月十三夜の名月○天王寺一茶舎
月の名月 九月十三夜の月

十四日於茨
今八五日○岩倉祭十五日他 小山○小金祭他は日
舎三月は 豊おし○栗田口祭他は日 多祭 祇園牛頭天王の安羯羅神王
めむをめ敬梨女をめとりてくらくを多八王子を多舎よいるへ神之
惣光天王(太歳神)麿王天王(太将軍)俱摩羅天王(太倚神)影堅
神天王(歳刑神)良侍天王(歳破神)侍神相天王(歳殺神)宅神相天王
(黄幡神)蛇毒鬼神(豹尾神)以上侍四方簾盆内侍に委し
○一宮祭他は日 河内○神田明神祭他は日武蔵にあり
将門 異也○度舎彩嘗舎十六日伊勢 桓武天皇六代平ノ
於茨○思舎祭他は日 東山
○山口祭他は中己午 周防○呉服祭十八日あやを祭ハ十七日と
は玉比四よあり 恵神天皇

の由字伺知仕之と呉服屋より受渡し
織宛織四人の女とまつ〳〵せうり見渡い筋京の胸形大神ゆちれ
りをこの女いはの玉よりさるよ一日本紀よあり。○**婆利女**（ギョン）
かの宛織とおやたちとりつよるべし
祭　廿日言辻宮町の西よりむらーい七日廿日めーと中れちうれ
月とせり　先年此社信養京予に問云此神神弁女天女これ
とたんぎよとりつよるは又此社のいれをーえうるやるいう
予幸に字治於書して所えるられいまつげてちらーいーむらー
出雲のお国あるくのむすめ此所にてうちぜうにはさめんと
多新山よをーーーーきれば生弘敬とのあるうてのちい文よ新
まべらをあるはせへうさるてこの所よおさめちーよ塚のるうち六
七間ゆとりくをえ住つうで景地とるゆるとほよ伺くやらん社とさ
てつるーーちうを社放をて弁さを女よ祝ちーー今案安義（イツギ）ノ義信
弁さを女と伺猶厚神さの才三女といひつくり又牛頭天王婆娑
厚神さの三女とめとうちうを名と婆利女とるうー蟲簋う
ちるをうう迷これとるよ弁さを女と婆利女とりつーーかの町よ
い要昌とうう又秀吉太閤此社を東山佐目牛の八幡宮の侍よ
うつーーーー

吉祭 日日上吉社 廿四日あり ○天王寺縁灌頂 日日 拾廿 ○太(ウツ)

祭祭 十二日牛祭と云 ○宣祭 廿二日 ○天満鏑流馬(ヤブサメ) 廿五日 大坂

○木幡祭 廿四日 ○康谷(レンカタニ) 廿四日 ○逆髪祭 日日

○北山祭 廿六日 ○福王神祭 廿八日本号歩兵神 氷室庚申 ○

○嗚滝祭 日日 ○伴村 廿七日 伴国 ○擬(ムレエラヒ)蛭 厩上の遣魂として反上人ちう世を拾ひて

出家を出と入てちう ちう 年中り事書 ○聖宮乃別 原氏摂津 孫の世を拾おた

ーまたを六条院息而も秋を拾ひて おたーけ出出原

氏の忌まーて陰ーて九り七日をうとを ちうてみけー

に おーかをて足を ひきーてさあくくくひもひて 陰よ

ゆりの陰ーと 貞徳云桂川の陰くと秋くこれを同光よを十

六日より秋文の陰 禅ーのーのーと ○寒露(カン ロ)乃節 九日 節と ○雁始来る

日 令 ○殘ふ月 月よふ月を陰ひてをかり ○菊○菊合

○百菊 仙 擬く菊仙 大白 日 酔扇(スイヤウセン)物 此日 茅草日 合目更日 大秋吾日

乙廿花を埴 合菊仙 キり 花 乙廿花 茅草日 女花

(ムクノキ)陰更子 ○うが菊 池中物云 清和菊之乱 和の事 紫竹 菊を

はは菊我よをてうちう 清和菊うりきくとよめり ○殘菊 十日の菊 菊の物 色

花と陰ひて秋ちう

○九日(ク ニチ)小袖 仙 ○菊かさね乃衣 ○お整衣

○霜降の節 九月中 ○戮敵と書て月令 ○紅葉
もみぢ葉 色まさるもの 川のわたり けあ
葉を法ひてもて秋まで 又ふるといひても ○梅紅葉
○櫻紅葉 ○名木花 美花よりも
とむらひても ○柞 ○櫨
○柾 まさのたうつ 西果 ○楓 きりと
めうつ 柾実 仮 いひても ○多久母雲
○ぬるで乃紅葉 仮 ○榜紅葉は ○いてう 泥杏
○本乃実 ○板のこ ○おち栗 栗果 仮 ちる栗はいが
ちりたむき栗は焼栗は
○椎 椎果 城川百首に椎果と冬の歌に出さりそ故に冬といふ
一説あり 志れも点 懐い実よりつきて椎い秋季とりうらに

椎果て秋こといふ ○椋 仮 木株 ちぶ榜 木淡 熟榜
等椎匂 帝秋く ○茱萸は 芽榜 等榜 椋づき
○蜜柑は ○金柑は ○久年母は ○柚は 柚べ
ゆみて
○香物橘は ○佛手柑は ○まるめろは ○果蓏
の実は ○枳殼は 多子 ○柘榴は 実多名こ
生の浦梨 彩の浦梨 こうがしら 仮 ○極は ○胡桃は ○利木
○楪は ○榛は ○国栗は ○ひしんは ○松子は ○椋
乃こは ○さいこは ○きこくは せんたん乃実は

○楓のこは○たこのこは○南天乃こは○梅もど
よは○うぐいすは○野山乃色○野山の錦 紅葉
又虫喰て秋こ黄纈頌の○こゝ枯 貞座云草草のこと
林(朋徳)彩繡の林は 色付て枯るゆゑこゝ
うれと升いせを国形を意承語○仙蓮 仙
なると乃又まと入るゝ ○茅枯よ 花ぬ
いい秋こ○落ちぬ○思子草○草の枯 草の枯
秋こ○思
ひ草 草なゝ 仙膳は尾花の本
の色ひ草いまなゝと宮ぬ語○こゝ草 花膳
雲ぬお と八
るあり○わ遠こかゝ葉と云仮服
こ別よあり○こゝの花 仙

花きの
用る草こ○老母草 おかとの
まゝとき○花蓋 ○ぶんぶゝ
○ゐめひく 赤蓋
ひくは○草 草仙松茸は椎茸は平茸
ドゥ宿は いくちは亂茸は蘑
こけは思ぬ草は乙狗○松 平茸
こけは柳こけは 服○蓮 晩苗ひつち田
形米仙こ玉米
○彩 ○菊酒 ○孔 ○紅葉
二件 菊酒 ぶの古葉は 紅葉
○尾花の鴨は○綱代 ○衣こ月○袖の露
○雲霧雨○雲時雨○雨霧雲○肌さむこ
○秋雲 秋を内むこ ○彩雲○こゝ雲仙○こし

○雲鹿○彩綿（ニシキワタ）一束綿○衾（フスマ）よ衾を結びて秋なり

○秋深き○冬を待つ○冬とゝ月○若き歌

○秋より澄○若の秋○拙く秋○秋を惜む

○住吉乃神道（戊日俗）

歳時雜

十月

かぐる月　はる月　初冬　小冬　初冬　孟冬　陽月　遊猪　上冬（纂要）良月（左伝）　玄冬　析木　泰正

秦の世の正月とゝや　背月と称　背月とゝい伴　特冊　崩し　陰月

月ゐれいゝ　四方の物ちりそ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

いとおもゝ　又法神　世　世　世　世　世　世　世　世　世　世

答　又河林　家　業　坂　天　下　七　神　社　月　生　の　正　神　社　月　を

神　月　ゐ　ゝ　我　知　法　神　家　り　ゐ　故　書　云　坂　書　云　月　絶　伝　事

を　用　ゝ　陽　ゐ　き　事　を　き　ゝ　ゝ　坂　ゝ　陽　月　ゝ　ゝ　云　ゝ　ゐ　ゝ　ゐ　ゝ　伝　ゝ　陽　秋

の　ゐ　き　月　ゝ　ゝ　ゐ　ゝ　秋　月　ゝ　名　ゝ　ゐ　ゝ　ゝ　料　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

と　云　ゝ　遊　猪　ゝ　十　月　の　俳　ゝ　又　家　ゝ　記　ゝ　ゝ　ゝ　ゐ　ゐ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

な　小　春　と　ゝ　○　文　衣（コロモカヘ）　文　の　元　服　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

といて　ゐ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

○十月

の旬 一日天皇南殿ニ出御ありて南殿ニ二献の引物魚を
除ク云々公事抜原於政おのおの主殿寮炭をそなふる
あり長あり〻多炉炭をそなふる事伝り○神送 一日法勝寺ニ
ゆくとなる公卿 ○燃
糟と食 一日あらうに荊楚
の人食ス(事文) ○進炉炭 煖炉炭 舎人
月一日ニ有司煖炉炭をそなふる民部ふい酒をそ
久して煖炉会をそなふ美華保ヨリ
こうに十月朔日ニ宮ヨリ法人堺ヨリ
禁市ヨリ車出て後ニ朝ヨリ美華保ヨリ ○麦子
乃餅 内裏式云 十月亥日餅を食ふ邪を
除く 陰陽家忌除集ニ
より山鉾をまれい鉾ふてきらめ
ふくふわうちをとそなへ
伝ると世俗四答ニアリ ○立炉節 十日の
○多ざ道 ○射場始 又日左右の馬つ
よを天子弓場殿ニ出御ありて
ゑとあるを子は射庭をあれ
ふてらふ公事抜原 ○殘菊宴 日日 録ニ
除く事を
忌 五日 ○十夜の念仏 日五日より
十又日ニ ○真福寺法
華会 六日九日廿日より七ケ日の間南京堂にて
を開らしむ 八十日六日 長宮大臣内裏の忌日ニ内裏
の内ニ
ど多りこ事 ○維摩会 十日ニ
日真福寺にて維摩経を

海をらの十六日大織冠の
御忌日なるゆゑなり事○金比羅祭 仏 十日段位
りあり
○清新講 十三日 日蓮上人忌日○下元日 十日十五日の事○水官
解厄 正月上元よい天官紙と称す七月中元よい地官紙と称す
十月下元よい水官紙と解す(書云故事)又云水官王孫
百司人員の禍福吉凶をつかさどる天曹よりして厄と解をえらん○おえこう 一向宗ありとこゝろ仏
○東福寺開山忌 十六七日 聖一国師忌日也 天福の紅葉をみるも此こゝろの裏なり
○夷講 廿日高家より祝ふ○大社神事 中戌日○神集 出雲
○神の留守○神むつく 廿日○小雪節 十日中之○法

拂寺大業会 廿四日又日の号あり 於苏○燈開 仏燈火焚きまるは開 焙劫は炉。炉は
切火 火桶 仏 相火桶 ○茶の口切○初時雨 時雨むらさめ 名時雨 おくれの時雨 神の時雨
○川寄の時雨 松風の時雨○初霜 霜の降 仏 霜の銅は霜 柱は霜の花 月の霜
青女 霜の女 ○蓮花 木の花 衣木の蓮の女 蓮華 ○木枯 色を枯ひて
○おとなしる あるなとなる ゆるとなる とゝひても名をつゝ(新式)○柳枯 ○冬木
の梢 ○柞野 柞葉 柞野 ○落柿 名草のうち名をつゝ
○荻枯 ○葛枯 ○蔦枯 ○桃

枇杷葉俗○菓の部は○山茶花は蠶糖集ニ小字部梅花
の次○かへる花は○牡丹は○八手の花は○蕚
蔓は○ほそのを○草木葉は○甘草引は○蕎麦
かるは花い八月○麦まくは○初雪初雪きゆ○初氷朝
○猪カ子ゆふ○さゆる朝さ○寒き○綱代
あらろ木あらろ○氷魚○ひとの俗ひ大和語○千鳥
浦ゑ云 磯ゑ云 川ゑ云 夕汐ゑ云
沖ゑ云 子ゑ云 星俗 陳ゑ云 ○ちづ市 魚とるむと
て水中に網

とつまるく宰ニ負注云宋の
字日本紀よりとよめり○あ雪のうきゆの云○雪をのよ
ち因名乃皆俗○鴨あぢのむらる高鴨俗たぐは
思鴨は白きうもは水鳥鬼のるこ○抜真ひは
○鴨ゑは○生海苔は○鯉は○樽○巖竈
炭白炭俗賣炭の部は炭部は小野炭は
池田炭は そこやきは まち炭は 備炭は 炭ゑ ○歎炭 胡麻集
羊羹とよ子ゑの市ゑ西のうちよ炭と○錦たなわ俗
ちて宮あ生は因とあてめ 吉津市
ちうちは ちつむは 莚織は ちうは俗
織子は ひちうは たりは ちうは
市因 俗かゑ 文市因は ○食 ちきこ武
ちうき ちうち因 ○紙子俗○蒲團は○頭巾

きるつきん。たんかは。液効入液立冬の節十日入液こ
を比腸効降幸せよ
○冬籠。おくらまゝ。○雪垣 俗小山ゑ大雪降て京換きへき用意ゑ
○雪仏 雪の仏尺寸と計
ゑるものこ或ハ十月こ

十一月 霜月 雪月 雪月 神楽月 雪月 師走月 黄鍾 天正月
周の世ゑは十月を正月とせり 元と暦ゑは天正月と
以英陸い 十月の俳こ。○暦数 一日十月ハ一陽をもつて生ずる月ゑれ
ハ一年の暦数と基て子ゑ中数有よ
り天子〳〵てまる
半とゑ 公半 ○こよろこ書 俗 ○朔旦冬至 十月 朔日
ゑ冬至ゑあるふと云也 廿年ゑ一度まる半こてめてたき祥
陽なりとして生日ハ天子南夜に出御ありて旬とこるわせ治
公表とまる半
ゑるとこ 公半 ○一陽の節 十月ハ一陽の日こ冬ゑ一
陽来復ゑ孝経の説ゑ
冬ゑ三度あり一ハ仏極のむり二ハ仏元ゑ三めて冬ゑこハ
日南ゑ行ゑ冬ゑ初りかるゑ冬ゑ冬ゑと云て 後日と日をい
ふも陽後 ○宮線 キウセン と添 ソフ メに 晋 シン 靴の世乃比ゑ宮中
のこてろこ 紅のいと生ぎとて日ゑけとも

ゑ[illegible]ゑ[illegible]のはより日とよもさ一線と原と巣防記りわ山方の世話ゑて大のふ[illegible]ふけつのあふよしをいつり

○屈優（クツ）と鞦韆（タテーツ）○襪（レトウヅ）とたくまるゑろこてゑはゑ[illegible]る者分月志ろ[illegible]りとも[illegible]と姑よゑて[illegible]もゑ[illegible]と踐の[illegible]ゑ[illegible]と崔浩り女俤よわり○赤豆粥（アヅキノカユ）共工氏の子を[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]しが殺[illegible]と恐て[illegible]ゆくよゑ[illegible]の日あづきゑ[illegible]ゑもて[illegible]れをゑ[illegible]と前[illegible]歳記よわり

山方[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ

公卿の座いと人〻出簾座にて天子れ後のうちく参るを
殿堂とゝみなまらく調らて帳台より出御なる由垂衣掛畳を
めて此間とめそら天子の御垂衣はさゝぬきを
めを事は所のかハ(ら)帳台よりハ(ら)ハ(ら)まとゐと乱舞を ○殿上の
湯殿 寅日朔旦いまやうるどうゝひてゝ乱舞を
次第は間とゝきて小の陪をめ(ら)又節の所はむ又云
○狩の供 巳日清涼殿にて御覧を云
れらは供のわらゝとかりのつゝひといとく見とよ
の所狩とい ○童女御覧 卯日清涼殿にて御覧を云
いらく 太平節とい瀧見系天宝古曲
よまゝ〻〻けを女おまらゝて琴の曲を感して又弦楽を
ゝして奉てうゝとゝ見又節のゝ〻めろゝとゝ年中り
事お ○結縄祭 中寅日さゝふいくの祝詞の離れ所と拍
合 きて身中よりのむり切紙あり宮麻志

麻浄令より事おこ
ふとゝや 公卿相原 ○新嘗祭 中卯日これいと年のた
上義こひゝてのお つ拍と神よまゝ世浄
十二也云〻(公事) ○豊明節会 中辰日見いとゝ〻の拍
て久男もきゝめ〻所下ゆ浄よ と神よまゝ世ゆよ
れよ見会とおくるゆる公事相原 ○日吉陪膳の祭
中申日見い建暦三年十月十八日より初て反上の供をそらる
豆ゆる八日より延暦ちれ所供也乗ちて皮云けめにおゆく
誅せらるかゝ〻の事ゝて毛日 ○賀茂陪膳の祭 下酉日 小祭見
ゝ所所敬ゝ久ゆ ○賀茂陪膳の祭 下酉日 小祭見
ゝ先蓋日に調乗ゆ言乗とゝ
り酉日ゝは所禊ゆ座生よ供奉〻〻儀式不信ゆ同一社
所の義ゝて供奉人ゆりまゝ立の儀ゆりちて所浄乗
ゆ山まゝ〻い宮多のゝとはゝ見させるひて宮ゝ正之年十

日ちをたーまる
とうや（ちなみ）○東三条法神系（下卯日拾
放ふわり）○里
神系○小忌衣（ところ乃神
岩いの神）○日蔭の糸（日かけの糸
ところ）
新嘗会を神ゆけはく忌ものの時
日蔭の糸ちなどもは神すの時
ひろ〳〵古今
集よあり○河知女○庭燎（かがり
世の名）○採物
神うよ　えそぐうよ杖笹弓たち　なをひさこ
所ゆり　諸舞　舞こわらまたとるあるいとう物の舞といふ○カ〳〵神
うるゆよ○大前張（ゆ人　木綿四手　ゆよむぐるさいく
をるうる　井祭型　わきゆこ
○小前張（こを松　ちぐやいく
大宮　幾田　きり〳〵
いそ〳〵ちぐるこつき　総角
これ〳〵ゆるゆひゆるゆの

○千歳○早乗○星（きしてとくはふこゆよつくる
ひるめ　ちなを（場主）　鈴金（内
不返し）を的（ついとのうく　河内乗　太くらうくいの主も
年末わり　委　梁塵　是　案　おおよあり　時　季を　持るり
○御火焼（他世　清河　答る　神　系の　篝火さく
なぎ　などを　表する　やとの　由　作り）○子祭
子日　大忌　夷の　古ひ　ときこ　二さる
大祝　なと　使（作り　子　灯心　他　○吹草祭（八日　稲荷のお
いそぐ　ると　ひ　ぐ　ぐ　ぐ

堀河の東にて法華経を書写し給ふ
四十八夜講とて つとめ行ふ
者大師の忌日に始法華講経と称して玄義文句摩訶止
観を能説ふ台家をも兼ねふ教恩の講とおこなひ行ふ
五家にてあづきの 上人の忌日の法華会
ゑひとたむけ行ふ ○お佛事 廿二日より八日まで親鸞
まるとしておこなひ行ふ ○御祭 廿七日十月祖師聖日の
世話よお市堂にひろまる ○冬籠 冬ごもり
ゑもおんまつり
といひつけ ○二嶋の酉市中酉日 ○宇賀祭 廿日
伴豆ゑ
○初雪 ○雪 雪の花 六の花 わた雪 雪ぢ
雪つゝは雪ぶけはゆきこゝじは雪おこしは雪佛は雪女は雪
の肌は雪女といふ山中の雪けらちらにあるにたるのぬく雪仏い雪にて
つゝまる仏に雪を広雪布袋雪の獅子 ○雪吹 ふぶき
るどみふ雪にて作る事 ○みそれ みぞれ ○あられ 霰 ○霜 霜
○ぼら 鯔 ○銀竹 ○みて 仏 ○氷 うすらひ薄氷 氷面
陵 氷の衣仏 雪ぶる氷 ○冬こ玉梅 ○水仙花 金盞銀盞 蠟梅
集よい小雪の花の花 ○葱 根深 ○狩 狩場の雑 狩場の名 ぬきて立る
雪乃とりとい〳〵雑の事あり
○夕カ 雪指あ月の雪あたら ○雪さらひ ○雪垣
たらおれさう
とをふる ○とをる茅 ○鶯鳥 ○そうのおち蕎

○力芋(チカラ)は○鶯匠(タカジャウ)は○鯨ほくは
みくらは○初鰹(ハツブリ)は○鮎(イサダ)は○石花(カキ)は○ひゞは
○あらぐさは○はめくさは○雪沓(ユキグツ)は○うまに
のる小出の雪中よりもちゐる○樵(カンジキ)これを除雪よりもちゐるなり
堀河百首よりよめり○太平記よりあり

十二月 志はす 去年月 梅月 三冬月 季冬 臘月 除月 大呂 極月 仲月は霜蟄(翰墨大全)むしかくれ(法苑
よ仏名を行ひて罪障ひまなくつくるなり故に除夕世日と
いはゞ去る年といふべし大呂い十二月の律なり 臘月の義
窮月 急景 周年(テウネン) ○乙子(ヲトコ)の朔日 世話人のしるしるる物なり
いなり米あり
○忌火(イムヒ)乃御飯(ゴハン) 一日六月より ○大神(ヲホガ)祭 上卯日 ○天智(テンチ)
おかし 四月二日
天皇(テンワウ)御國忌(ミコキ) 三日崇福寺(スフクジ)
わこふ
奏(ソウ)十日六日 もあり 四年六月上の申をうらなひて
方の神乃(ノ)宮(ミヤ)はゝ(ゝ)きよしと奏せ(公事)○月(ツキ)
次祭(ナミノ)十日 ○神今食(ジンゴンシキ)は日六月より ○御祓(ミハラヘ)乃(ノ)はとり
おかし ○御佛名(ミヤウ)十九日

廿一日十三ヶ日仁寿殿の西方にて三ヶ日
壺の法仏の名号とをる（六根の罪と滅さるる事）
○かつら錦　佛名の時　卯の法師
○栢利沙弟　はは母の
○市髮上　十日義人
○土牛童子の像　大宮日
四方の門に陰陽師これを
とのくにおそらる色の土牛
あり疫病と法せんのわざ
土牛と作りて
牛とつくる農具と門にとき
まる色牛とすむるわざなり
○荷前乃

仗の宮　十三日
とをる
て
ゐき新后
后のみ
后下のを
○内侍所の法神
宮懐
ひちく
よ高神
ちーこ
うつ
きむ庭
頂　十五日
上人或い
○着駒の政
○荷前乃
○家勝寺乃
○温糟粥
八日

五山にも又禁中にもあるとこそ云へ共も十二月八日都の法大ち
よ法備会とかゝ毎に七宮五味の粥とゝのゑ給と臘八粥
と云
(事文)○大徳寺開山忌廿二日○和布刈(カリ)の神事
毎日の夜の廿の刻より神宴あるよりゆきてめとる所
とかゝ此て元日より神おりそ給ふ○斎宮(サイクウ)の
(ヒ)(ム)
殿馬 晦日の夜伊勢の斎宮の樹下にの侍より小祠(ホコラ)あり此こゝに
里人殿馬とかゝふるあり殿神とかゝもるわさ
とゆいて天王ちの殿公法所無所より四さの式樹下より書して
殿馬の神よおひて殿神の言にのりてゆくさきと申殿馬
此神宴ゆるとゝとるさまつる事あくさて法恵法師の
功力にしてこの神ふぐらく山より生給さきの春分とかゝつる
よし○逗(ツイ)儺(ナ) 晦日をにやらひ 逐儺(ツイナ) 爆竹 大舎
人寮殿とにとめ陰陽寮殿文と南殿の庭
(公事根源)
事あり又爆竹と
とり 書云故事○節分(セチブン) 立春(リッシュン)の
日かゝ○天条天神系(祀)
しにくのもち とゝろう 又条天神いかゝ麦名命と菜茎とにさき
殿神とゝや世よ殿やとゝやふはいかゝどのおさは勅とゝくふ
とある神也えやこの事とにゝきさゝ殿神あれいゝや芸分う
きゝてくとゝろと申て魂事をとて侍り 世清問答より白米いれ
気とさる菜るゝ(餅茎)あり きゆく殿神とおされ めんこ
よこれとたくよ侍とゝ高くの餅とくゝい也より殿とゝ功結あ
ると日問答
よみへゝ○まあう川○寒(タカラブネ)殿ようける永と食の
のトに変て庶る
○ひゝら紀ちと○いと
(公事根源)
事あり殿神とゝらよ侍る殿の赤情皇衣して逐儺(ツイナ)
(ツイレ)
とり 書云故事
しにくのもち とゝろう 又条天神いかゝ麦名命と菜茎とにさき
殿神とゝや世よ殿やとゝやふはいかゝどのおさは勅とゝくふ
とある神也えやこの事とにゝきさゝ殿神あれいゝや芸分う
きゝてくとゝろと申て魂事をとて侍り 世清問答より白米いれ
気とさる菜るゝ(餅茎)あり きゆく殿神とおされ めんこ
よこれとたくよ侍とゝ高くの餅とくゝい也より殿とゝ功結あ
ると日問答
よみへゝ○まあう川○寒(タカラブネ)殿ようける永と食の
のトに変て庶る
○ひゝら紀ちと○いと

こゝの門乃なよしのうらひいらぎ〳〵とゝ壇囊物よ宮多帝のちは
勅ゐる乃奥ゝく藍婆恕王とて二氏の尼あり郎にゐる主へべき
との思ふつの告ありとはちの列弟養きにようてすめとうちて
これとゝゝひゝゝぐ巣とゝよ百人とくいむとちるにいゝとひゝぎ
とゝ門よはゝいき紙とのゞるべしと以書あり云く異云はゞし
くゝ宮延喜の名よつゝくてゐよしのうらと、かきのへまい本況い
ゐよしなるゝ〳〵壇囊物いあやまるおゝき始ゐり法主と主年
に捨てゝき書云もゝくゐうゝ法よゝ用捨して又法乃色し

○吉田大稜（ヲホハラヘ）他節分火炉ニ火焚事也　○やくおとし○百く
ゝゝひ○小寒の節　十二月節ニ　○かゝ記菓ゝく
ひゝゐる日今○大寒　十二月中ニ　○諸潛ゝ朝今

○臘日（ラフジツ）　○蜡祭（サイ）　赤平（カヘイ）陶祀（ヒ）陶の世は成乃日　秘の世は
蜡も同日ニ臘い先祖とまゝく蜡い百神とまつる夏の世は
赤平といひ殷は陶祀といひ周は蜡祭といひ漢は臘といて臘
い猟ニ猟て獣とゝて先祖とまつる故ニ又臘い接ニ新放文接
ゝる乃義ニ蜡い索ニ乃物と合せ祭ゝて索ゝてこれと言ふふく
狩書文記系
よゝいし　○年内立春○小ゝこゝゝ他晦日のお日ゐり

○除歩（ジヨヤ）　歩の名　歩末歳尾　年年　大晦日他
除歩　ゆく年ゐゝ　年ゐ　年ゐ　晩年　○玉祭
つまゝく年にゐきゝのゐ歩とそゝ玉まつる云く枕草紙よ四つゝ
とゝきゝのゝ気始よゝくゝといつふるどゝゐ歩乃歩乃歩のゐゐ
報恩経よ十二月ゐるの年時ゐゝ
て正月一日卯時よ歩ゐゝ　○異人土産（ヲカ）　坂川百年
よ玉の

おなじつゝ[illegible]とこゝ[illegible]
志いもの[illegible]
よ[illegible]
年[illegible]
[illegible]

○門松いとなゝ
[illegible]

○春と隣○[illegible]
[illegible]

○[illegible]記○[illegible]
[illegible]

○衣[illegible]
[illegible]

○年[illegible]
[illegible]

○燻掃 俗ハラヒ
[illegible]

○[illegible]
[illegible]

○[illegible]
[illegible]

○[illegible]

ゐよきうひめうの川いく志ゐと以へと。
見れば他の乃ゝゝ花ゐ叶ゐ後の時節ゆ
み佛本ゐ獄ゐゐ面ゐ雪の見ゐゐ
ど。ゐゐくゝゝく生ゐ岩はゐくし生ゐ山つゐ。
いま井ゐゐるゐの井乃こ千四ゐの毛
乃形ふし。七十二侯乃始のゐゐゐ高ゐ。
此図の可ゐきゐ〳〵ゐ井ゐゐ始し井
ゐゐくゐゐらゐ。まゐ仙家乃こ自

句世乃こゝ事（コウキヨノクハイタイシヤノナンサウノ）紀の事こゐ七事別（ヲンレウ）紙
畳（テラ）ゐなどの新（タヽヒ）。わゐ城郭（ジヨウクワク）にあゐさゐい。
きゐ〳〵ゐ季（キ）とゐ定めゐさゐ。ゐゐ事
どゐおゐゐよ。たゐわゐゐ一隅（グウ）と拳（アゲ）
て。他乃俗ゐゐ書きゐ。ゐゐ席（セキ）
よのゐゐゐ分ゐ世ゐ世の事ゐ出ゐんな
い世（ザイナウ）ゐ井ゐめゐゐゐ。ゐゐ
きゐ〳〵世

非季詞

○神祇

神事（シンジ）○法勝寺（ホッショウジ）祭（マツリ）　住吉社の祭　八年中に七十餘度と云ふ○梅の宮○紫宸殿（シシンデン）　樹神なれいるまれにまれなる　おかるる相木によめり○蘗（ハ）

利塞女（リサイユヒメ）　殺生禁断　年徳へ

○釋教

鹿野園（ロクヤヲン）　貞性法師のそれと傳いで　白仙よりそれ自ずから　○妙法蓮華経

○仏元の撥を取びら○楊柳観音○雪（セツ）

山童子（ヒヤウドウジ）　只今園位より四句偈文　はの名なり○雪山と外も雪と云　世説に雪

山あるべし山

○天象

いなひかり（いなまい秋く電光と云よいくい白神よ　ようて稲妻とも成へし云）

○初風（初風なれおろし　初名也い雑る）○雷（初名くるり　いかづち）

○名所

和泉の国○放生河（ハウジヤウカハ）放生会ハ秋ノ○櫻河○柳ノ浦
○柳の水○橘の郷○菱ノ郷○菜摘河（ナツミ）○柞（ハヽ）の
森（モリ）貞徳云名ハ新ノ○志賀の山越 堀川次第ニ云ハ高ク入ルと云ハ志賀ノ郡ニ生
これと連俳ハ新ノ○富士の雪 貞徳説新ノ云ハ六月云ハ御傘ニ委

○生類 かもめ 鹿の角 日比○鹿の毛 鳥
鹿と指て云云○鹿 ○ちゝ虫 貞徳説ハ秋ノ○雪鳥（ニホトリ）日隠巣ハ
つゝ

○鶴（ツル）乃巣（ス）○雪ハ隠巣○鴨（カモメ）○都鳥 貞徳云ハ伊勢物語の
神ハ友ノいさ雪の記ハ秋の比ノ歌ノ云ハ新ノ○玉虫 貞徳説ハ
貞徳云新ノ一説ニハ秋ノ○秋津虫（ハ）○かゞろ子○蜻蛉（セイエン）○かゞ
貞徳云新ノ○雪雀毛の弱 月毛ハ毛ハ毛ハ○黒牡丹（コクボタン）
劉訓（リウキン）牛と紫ノ世ニ牡丹を新牛
とかゞ忘牡丹とて牛ハ新ノ○干魚（ホシイラ）の類（ルイ）

雜也

○植物

[illegible]

花紅紫ハ花紅紫の匂いうつくしきもの也ゆえ
へうつくしき花なれとも花の匂
ふハ秋の花なれとも花なとなく
こもるまあらん秋なるへし○日落ひかけの名
日永い冬
○和布○蕨ワラビ○桜の木○梨乃木花とも
実ともいい
て新し○柏○椋○千草○菜
畠○磯菜つもい○島れ草○蓼○浅茅
○桜の木乃板○桂花い○むぐら花い
の花きくこれにしく○ちちなし○木の葉枝よりも
て数〻奴匂祢ふ〻い○まこと○かせぎ貞恒云枯木
新ふ〻し
麻い
秋こ○俤花こ新也○ちる紅

○人倫

末摘花ツム 当時宮のふ
ふ〻ん新こ○夕顔の上新こ○空蟬
のきこ○義経ふの妻ふ
ら〻ん○柳下毛○梅林
和当○萩野貞恒云人の名
ふれい新こ○花よめ貞恒説
新こ
○花むこ同あ○苗裔ゴ孫の
半こ○桜町中納こ

貞徳云 新く ○唐殿 貞徳云 新く ○銀麻 仕の半こ〻〻の
ちらる新こ

○食服

茶乃花香○花うや○菜雑穀○菜飯
○菜汁○干菜○干かぶら○土生姜
○いけ半房○いけ栗○塩梅○梅干 いそとと いへいたこ
○煮梅 梅とわを梅と よるといくいるこ ○干蕨○干瓢○干大
根○干棗○瓜 茄子の高物○いり豆 みを豆 るの豆

○餅つく もちつきとらひて十二日 乃ゑるゝいみ〻るゝ ○赤小豆粥 祝ひあれ い香こ
○梨○ひえ○きび○ごま○蜜栗○かゝ
○蕎麦 そら食おめ ゑるゝい新く ○蕨餅○薯蕷餅○葛餅○薬種
の芋茎○楠皮○きゝく○松実○青皮ホ
ら陸云こおよも あゝる新るゝ ○山のいも○蕨もち○葛もち
○麻乃菜食○塩この粉○濁酒○鶴の飼
○味の樹煮○葛袴○高ふぶ 貞徳説 こ云お

帆ある〻 雜く ○ 孝〻かまぶとん ○ 花のゐどし 花田色 正花に帆

○ 花田いろ ○ ちちぶし 漆 ○ 曝布 さらしぬの

○ 裏地の錦 ○ 經帷子

○ 人事

詞の花 貞徳云正花 ○ ひるねひ 貞徳云 ○ 野

あ〻ぢ 雜く 雜く

拉ひ ○ 呂乃ちぎり 貞徳云 雜く ○ ちぎり舞 ○ 求子

貞徳云 ○ 汗 貞徳云 雜く一説文とつ

梁塵 校おもみくさ 雜く

○ 樣 ○ 目星 ○ 白の取ぶ ○ 鶴

乃雪 ○ 眉乃素 ○ 所金骨 ○ 雲雀骨 人のやきる

あ〻ぢ 雜く ○ 品玄 貞徳云 雜く ○ 藤原氏 ○ 花子の狂

云 ○ 柳文 柳子厚文集く

○ 雜事

梅壺 貞徳云 雜く 凝花令の名く ○ 柳営 ○ 花壺 ○ 柳

管 ○ 柳樗 ○ 柳まゆ板 ○ 扇網 ○ 蓮花

ヲフ
笠の壷○栢（カヤ）　椽（トチ）　桐（キリ）　ホウ　榎（イタ）○ちゃ花　柱（ハシラ）
子ゝ伯おゝ葉平の京れ
柱のゆく負座云新く　○泥の壷○年華（トレノハナ）
○花ういけ○花丁子○灯乃花○花ぬり
○花形○叢釜○茨縄○藤つら○巖
縄○伸子笠○細代扇風○細代車日傘
○黄泉（キナルイツミ）冥金（メイキン）るり○子の年　世の年ホの
十二支　雑くむりいえ日の勺に季。
をゝゝゝゝを年ふ用

發句切字

弐（佐宝のかる　ちつむ小）　えがる　かゝもる　ゝ星　ゝ雪　ゝ雨
らん　む（一字ゝ及といて）　めり　や　ぞ　し（現在未来切字　くるきい切字）
ゝゝは　いるし　ゝゝし　ゝゝし　さぞる　かし　ゝ
かゝ中のゝ小ゝよ　かゝゝゝよか　やい　のいこ　これ　ゝり　いのる　何
つ　いづれ（いづこいづくいゝよせん）　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
さそよ　ぬ（おゝんぬい切字　ふのぬい切字ゝ小ゝ）　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

太大器世話て考へし中分よ
下知の切 仁の切 二字切 三字切 とはい
大はら 三名切 三陸切とも 玄妙切 七ッのや
口あいのや 切や 拵や 類や 見ふい所作と作し
中のや えのや きえのや こーのや
初仁の分副名事こ
三のし 現主 白ー 宝ー 主ー 短ー
亜ー
未来 ー ありし ひとし ます

此二ッハ切字なり

主去 おりし 思ー おろし なりめし
此分切字なりけ

○ふの如 おりん如

さきぬる ちぬる ちぬる とひぬる 此分平切字こ
さりぬ ちずぬ ちずぬ とひぬ 此分ふの如切字なり

太ぬの字の下になるの字付い早くるの字付
らしてぎに通ふとふのぬと云切字
なりけ又へけ せて え め れ のかるもと

うつる如いまさるく切字なり
えへ如 ちぢ如 ちで如 さけ如 きえ如 よめ如
させ如 ゝ笑ゝ

俳諧ゝ式

○百韻

面八句 七句メ月ノ定座　裏十四句 九句メヨリ月カ秋カ十三句メ花定座

二ノ面十四句 十三句メ月ノ定座　二ノ裏 初裏ニ同

三ノ面十四句 二ノ面ニ同　三ノ裏十四句 二ノ裏ニ同

名残面十四句 三ノ面ニ同　裏八句 七句メ花定座

○七十二候

百韻ノ三ノ面裏一折移タルゝ

○四十四 説席ニハ世吉ト書

百韻ノ二ノ面裏三ノ面裏ト二折移タルゝ

○源氏行

面十六句 十五句メ月ノ定座　裏十二句 七句メヨリ月カ秋カ十一句メ花定座

二面十二句 十一句メ月定座　二裏十二句 初裏ニ同

余波十二句 二面二同　　裏六句 五句メ花定座

○歌仙　源氏行ノ二ノ面裏一折 移タルヒ

○米字　源氏二百韻ノ三ノ面裏一折八十八吟成

○五十韻　百韻ノ初折二折十リ

○首尾　面八句裏八句 ○面合　面八句斗

○句数 并 去嫌

同季五句去 夏　一句より三句まで続く 三句より初句に戻る

同季五句去 秋　三句より五句まで続く 二句より初句に戻る

同季五句去 冬　一句より三句まで続く 三句より初句に戻る

釈教　神祇とはお

三句 神祇　一句まても句より句まで 三句より初句に戻る

三句 恋　二句より五句まで一句まで 恋は恋の字おとを恋く

三句 水辺　山おはお

三句 居所　一句まても句より句まで 家の風俗とかの記載ハ二句去ル

三句 旅　三句より多ハ七句 ても苦旅の字一座三三

二句 生類　句ト虫虫ト獣魚ト鳥ト のもの句より句より多ハ

三句 神祇　一句より句より句まで 三句より初句に戻る

三句 述懐　一句より句まで 三句より初句に戻る

三句 山部　一句より句まで 三句より初句に戻る

二句 人倫　二句も句より

三句 生類　句ト虫ト魚ト獣ト獣 句ト虫ト魚ト獣

二句 植物　句より句より句より多ハ 草ト木ト草 草

植物（二句）木ト草ト竹ニ付テ多クノ名アル中ニ竹ト竹トハ五句ニ
名所（二句）二句ニテ多ハ古ク名
秋分（三句）三句ニモ成ルアリ一句ニテモ成ル名
降物（二句）一句ニテ多ハ雨ニ成ルトカ雨ニ成ルト
算物（二句）二句ニテ多ハ霧ト名但霧降ハ算ニ
衣類（三句）二句ニテ多ハ字ニ成ル衣字ニ五句袖ト袖三句ニ成
国名（二句）一句ニモ成ル名不ト国ノ名モ二句
時分 夕ハ分ト〻三句ニ成 朝ハ分ト〻二句ニ成 夕ハ分ト朝ハ分ハ種ニ成
天象（二句）一句ニモ成ル二句モ成ル

○句ニ成ル事

人倫 人名 名所 国名 ニ成キ地 降物 降カ

二字カ成ル 火辨 風辨 朝ト夕ト昼ニ成ル時分 日月星ト昼ニ成ル光リ 木ト竹ト昼ニ成ル植物 虫ニ成獣ト昼ニ成ル生類（太ノ分二句ニ成ル）

同字 生類 植物 時分 夜分 衣類 速信 居所 弦辨 神祇 秋教 恵 常 山類 水名（太ノ分二句ニ成ル 日ハ一日字ハ分句ニ成ル 音訓ニ成ル分ハ成ル大概二句ニ成 辨ノ字ハ三句ニ成ル 水ト木ノ字ト一方植物ニ成ル 二句ニ成ル ベシ）

月 松竹田羽 渡 枕 衣 舟 煙 同季

此ふハ五句去ニ而ハ無しとハ云ても同しく日ニ月ニ月ニ月

夜ゝと夕ゝとも夜ゝと
宮てきし合とる〳〵 冠は烏帽子 綿は赤袴 夕立
小雨 面は笠 烏は鴉 此五ツ共に古式よりつけ来りしなれども今式にも嘆上へ〳〵きたれり
今のちつひ
弥生 師走 此二ツ共に古今とも異名の月なれども今式にも嘆上へ〳〵きたれり
山峯風嵐 此二ツ共に九例し
○同字別吟
春日は素も日も 篠竿は紫 鶏は鶏冠 我名
鄭鱗 勅命は令 弥陀 弥勒は弥代 代は代物
関白は関 中風は中中 南無は無 氷様は
様 行は行 軒は軒 粥は粥 雑炊は炊 狸は狸 竜
天智天皇は天目 主水は水 地蔵は蔵 金は
子 孔雀は雀 盂蘭盆は蘭 三日月は日 蜩は
日も暮も 岩は羨 今朝は今 皆は是 年は是 日
も今の字 幾日は日 昨日は不 嘆月
はさみぶしきたり 弥生のたひ戸は上戸

下戸(コ)天下(ヘイカ)ヨ下手(ヘタ)　芙泉(クワウセン)ヨ泉　海月(クラゲ)ヨ月　西王母(ワウボ)ヨ母(ハヽ)　百合(ユリ)花ヨ百ノ字　此(ルイ)類(ハカリ)ヲ〻〻大概皆ニ准ジ吟味ヲヘシ

假名遣大概

一中乃えを書事　中をゆゑよむは中のえとなり

越(こえ)　消(きえ)　関(きこえ)　孤(たゆる)　消(さゆる)

覚(おぼえ)　焼(もえ)　肥(こえ)　金(いえ)　此(ルイ)中皆(ミな)ヒとなり

一ゑを枝とよまるゝかるゝ其字のゑをとりてよみてるゝ事を枝と読ヘシ

志(エ)塩　いゑ庵(アン)　かゑ　雅(カン)いゑ　巖(カン)ゑる　栄(エン)潤

一塙乃を書事　小乃字つまも塙のとき

とゞ小舟　とま小塙　とが小川　とゝ山小金山　とき巻小巻

とゝ山小塙山　とゞ小梯　との小野　とこ小袖

とゞる小車

一物乃張付字いづれも塙のと成ヘシ

玉乃を　琴ゆを　袋ゆを　蓼の〳〵を

一をゝ〳〵をゝなどゝづまも端乃をゝ

をゝ〳〵ゝ　をゝ〳〵ゝをるを　ゆゝ　こゆゝ〳〵ゆゝをゝ

物乃言いづまも端のをゝ

とゝづま　端のとと　風ゆとと　とゝゝ川　とゝゝ川

ゆゝ〳〵皆とと　いづまも奥ゆゝゝゝ香べゝゝゝ

一とのま　とのづゝゝ　とのづゝゝ　こゝゝゝゝもゝゝくの

おゝゝいゝゝゝ

一をゝゝ〳〵ゝゝ女房花とゝゝゝ　端のをゝ

一をんゝとゝ端のをゝゝとゝゝゝ奥ゆゝゝ

一奥乃ゝ書中　大の字いづまもゝくのゝ成〳〵

ゝゝゝゝ大空　おゝゝ大方　ゝゝゝゝ大法　ゝゝゝゝゝ大原

ゝゝゝ大江山　おゝゝゝ大海　おゝゝ井川　大井川　ゝゝゝいづまもゝゝ

くのおゝゝゝ

一尾の字いづまも奥ゆゝゝ

ゝゝ〳〵尾上　山ゝゝゝゝゝ

一御の字いづれも奥乃れるゝ

おりまし　おりめし　おりんとき　こちたし

一端めへと書字　ふひへこよかまをいづれも端のへ

おのふひへ　忌　ねぐふひへ　乾　むふひへ　剛　いふひへ　言

たぐふひへ　嵩　はふひへ　迷　たぐふひへ　乾　あふひへ　洗

ちふひへ　拂　たぐふひへ　遠　たふひへ　湛　ちふひへ　撃

ちふひへ　遠　たふひへ　低　ほふひへ　伴　ふふひへ　荷

いふひへ　祝　こふひへ　唱　ふふひへ　添　さふひへ　傷

あふひへ　相　ふふひへ　叶　ふふひへ　粧　ふふひへ　致

ちふひへ　赦　ひふひへ　指　ねふひへ　浄　むふひへ　向

きふひへ　効　えふひへ　砕　ぬふひへ　味　はふひへ　侍

ちふひへ　這　ちぐふひへ　随　ふふひへ　映　ふふひへ　占

やふひへ　森　はふひへ　縒　きふひへ　嫌　やふひへ　嵩

たふひへ　乃ひと除ふるもの

ゆきまふ　矢　こまふ　苦　まき　書　文　うまふ　熟
うるふ　彼　ゆるる　蹈　あふ　与　そのふ　調
さうふ　栄　うぬ　植　をぬ　表　をくふ　加
此外あまき者べしひふへるよかふ五音は故よ語のへ云
る此れとうるまても中れえや奥のるやるといえすぎ
又ふひへよかふるとも志うき　白ぬ　半　かひて　慥　兼
ゐとい語のへるうと志るべし

一奥行ゐと下に書字
ゐ　声　ま　赤　小　熟　い　家
うゐん　右　熟　ま　ん　鶯　う　ひ　ゐ　右　ま　赤　ひ　ゐ　右　ま　赤
右れくのゐかく字あまき者すぎ　きりや
一端乃いを下に書字　此形端のいを下にかくし
おいの仮さめ　ひひらいない　たいゐ　ゐいく　さいく
一巾行ゐを書字　なまにかよゐ只一ゐよよむい中れる故
へしたとへハれる井れるまとゐ後者

ひるよりして
中れるとちく

くるる　たまる　ためる　ためるもの
うるかうり　はるる　まとる　まちる　そる
よる　きる　いも　ふる　此訓へし

一うれ字下に書事　下れひきのまに中れひるいうれ字
そう　俗　ろし　はる　中かう　焼香　ねうぐう　女房
ろうたう　白道　ちく　小こぶたう　堂塔　ちうとう　長座
ちうけ　俗　ろし　料　帝

右如多ようむ字れ下とうと読い大異うち字成へし
訓々読時いうとよ毎字いふれ字とうと読る
へしはめて読字いうれ名のこうるへし
一むの字とうれ名よ読事　口とつめて読字いうれ名の
ようなへし
むもれ木　むかしよて　むをむれ歌　むへ山風
むめ　むま　うこん　れむまぐ
一ちぬる文字いまとを　蘭ラン　雛ナンハ　陵とるはを

船波をたゝえ　芝菀をあらそ
一ぱんだうへ　まつうえと云　一柏たまいるへたゝ〳〵とえ
右ハ外かしこ　このきる　俳名れ　字なりロろ
もの　屋　ハい中乃ぬ奥のひやなどれもひ乃外
りのまる事もゆるるりとくく考ふ　唯
俳名遺ハ拳一陽ヒ而余い準えるるくし

所家物語ハ平記おの古りふ　時代
高ハ　るあるを　或説ハ源氏物語
宮の別ハ　ハる影　乗ハ
ハとも　ハ　の別いる　ハ　乗を
用ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
ハい乗を　ハ　ハ　ハ　ハ
ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ
ハ　ハ

とめつとそきこへぶ。されい雑とそこの花こ。
さうとそ侍(タイケン)つの歩軍(イクサ)の秋。義經(ヨシツネ)の
小國なるいをふしてるどくいきを面〜き支
也。(シカノミナラス)かこて吉の面却るどくいふ。ふ宮めとつ
ゐ。支ゆは有川ふ一の岩あひるどくいふ。結(クニ)
谷(カヘ)ゞ先侍(ヂニ)樓ふ二度のうけるとくいつく
なるうとそ。或仏の云連言のまい盞(スカタ)のむ
正花るるいきこ。佛偕ふい花よめ花まう

ぶるど正毛るるうう雑と自徳ゆ出しとと
ゐうるめゆとり。岩毛寄い京物とゐ
とし。佛偕い世清と本とそ。連言いう川上
吉の清び翠(コトワサモテアソ)び。佛偕い曲時り人事と翠
て。毛仏ふ毛言いむとだふこいきの京物
るうとそそ毒のひゐときに国多。佛
偕いきふさびきうし。花よめい毛ゆし
きひ井そ帰(ヨメ)いゆりそそひむふ毛ふ

抽ずれい。花をうるゆ
をおとすると。花まつぶ也。嫁
あるよりよりよ名づくる計とて。こ壺い書と位
よ用ゆるとうて何をと離こ。数ゆ名称員
の詞を。叫ぶ地文も。正しくいるる小い又正
ゆも用ゆこ。生ゆ狐い謡よ表ゆこ。
書このよい只返書ゆとと位動計とて。数
ゆよ謡を。俳諧よいかと迷ゆ出とうとて

用ひあるい号狐ゆどいあるあ書い表ゆ
よ宣ゆこ。隠ゆい唄と唱ゆ井を用て連
句よい夜ゆこ俳諧よい美よび謡あひ踊
ぐこ出るゆと表ゆよ謡を。又局い連歌
禁中時代のこて表ゆよあれも。
俳諧い歌可何ゆも局とゆうまつ
句よりて大ゆ出ゆこ。か振の歌あひ
こひぐこ。連謡のこと紀ゆ別乃

事是およ潜て接足もし。但海の毒と
云詞いとも能よめと回しかからむし
ものを潜も毒とをちうとなるを
改て毒沒なれば毒ます潮浴もまるる
べし。毒へて加様の事をもひ出るにま
ことの一段の物とも。峯より尾上を根毒
山山屑などを回毒とを連ねるを面と蝶形と
蝶とを波とあるとをひ出蝶縁法傳演女

毒回毒の沙汰をす。師伝を成人い毒を
ゐて超世一概ゐ論するなよ。加様の事ゐ
あるをひ伝を過とを。只清浄る師説
ゐ住をを私の利口をを。人と神ひ毒
世やうは一ゝ事。人と神ひ毒
と貴小業かをを。是をを師伝
を貴しし

執筆付端俗

貞徳云連歌ゐ上十ケるを賦物あ

墨と俳諧に長ずる歌おもふゝ俳言を賦せる連句のおもしろい俳諧之連歌と
書へよと（正徳元年三月十七日於長崎受言）一昨夜愛恵懐旧紙
又名ちゝ書こゝ也 行書いはめ
ちゝと執筆 懐紙 中よ 俳諧之連歌と生
自て発句を結びきゝ（師説）但又信よい俳言
の紙物ちゝ方もあゝ書してゆび
ヨノツヨ 発句のゆゝ小説をおろゝ筆とちゝ懐

紙とさづき（懐紙一重のおもてをもて又裏よりきり上をとゝて次の裏より表）墨紙
きゝ筆と添て懐紙よ何ともかきし
て筆と持添て発句を結つきゝ面発句出
いゝち俳して宗匠乃まを何ゝ宗匠俳諧
ゝ連歌とかけといゝ 又発句を俳してきし
づゝゝ。発句名ちを書ゝ吟ゝあゝ
モシ紙物ゝあゝい上賜下賜をかけて賦
何ゝ俳諧連句と書ぶゝ。或い書歌乃

二字をくりかへしてもかまはぬ。さてかるる字直よりいひて句下なるは仮名遣の時い
硯情帝右乃ゆふされをとりて。ぜつ美
恵の句を狐策ちうの吟まるこけて真切
の人を句を常狂ふ孝ひきく出きい。又
狐策ちう通して情狐苗句生なけて吟
しあるふ常回様こ情回くを時い狐策
右のごとく志て策狐深。情懐をとて情回

之俳諧と生なて。苗句乃出是は通て
生なてくいしあるを也。紅文名号ホの俳
諧を情回巨乃乃あるるるいで
右懐回乃俳諧のをく新了漢和清
乃形も回ふ也京人発句をもとして。之
所志ふ之賦ちを笑をもやうよ嘆
し。俳諧の二字紀氏古今集よりき語
ふ文字るれい巨言葉よりかるるるか

亦俳諧と書も不苦と也

寛文三年
卯霜月冬至日

洛下
季吟

星運堂藏板誹書目録

東叡山南下五條天神前
花屋舊次郎

誹諧鑑　茅渚山人雪成撰　中本　二冊

此書ハ明和中初編出板せしより當時まで廿三編ホ刊
江戸諸流判者高点書抜の句を拾ひしより本なり

誹諧礎　釣月堂一渙撰　小本　二冊

發句拙者なりの三字を雜意神
釈と判ず詞と五七文字を合句と成

誹諧綾錦　菊岡沾凉編　全部三冊

付句より連句源の系譜俳諧流の
傳統と引流義を考へし

誹諧持扇　李寄便用　懐中本　一冊

代筆書簡ハ多し其抜萃して俳
小遊文人懐ふて便用と為ス一冊也

誹諧種卸 増補三國人名牒　高井蘭山先生撰　中本一冊

日本大唐天竺五名の賢聖と和人物雅俗とをくらべ其業を
偉をあらはして俳諧附句なるべし端ぐるを乃便とす

誹諧季引席用集　撰者同上　横本二冊

此書は四季系類名所異名附合生類枕詞等の文字を訂
いろはにかなをして採出し易くしるくを注釈と加へ俳士は必ず見べし

誹字節用集　近刻　撰者同上　薄葉摺寸珍本

右の書は尚度益し誹諧所用の物産場往来の小仕
俳席の至宝なり俳人古今類を以て活用まれり

誹諧増續山の井　拾穂軒北村季吟翁遺書　小本二冊

拾穂翁は源氏物語を始めとして和書に注釈せし和漢の博識
として誹諧の季立の来に注釈せし第一本邦也

誹諧増補所名集　槐陽井躬之著　小本二冊

和歌に用ひる諸国の名所古歌実物芸術古文俳諧にまぎら
なる変わるべき産物其所に伝へる部説出を挙て俳業とす

誹諧季寄屏風　古来庵存義撰　高井先生校　一双近刻

存義老人の工夫をもつて四季を一枚乃屏風とし出来を
枕上に居てこれを自然と年中行事万物を俳言とするなり

誹諧手引種　一陽井素外著　中本　二冊

上の巻は四季発句の註釈別離羈旅名所歴遍悼亡賀祝発句乃仕方下の巻は附合乃作法類〻初学と為す

誹諧通言　並木舎五瓶著　小本　一冊

戯場に作者及ぶ場は浪花の産なり東都にて業乃俳諧なれども依て此書を撰ぶ是は三都は格里の事を審ら志せり一名史

誹諧玉池雑藻　一陽井素外編　中本　二冊

此書は老宗匠多年秘蔵せし紙屑を集めて席〻に見図せし事を随筆乃一名抄り風流流れ抄小人此業に得の事なり

誹諧四季発句帳　前後二編四冊

流行不易の句法の要体を分て其秀句を拾ひて冊と成俳諧の好士に与ふ

誹諧猿蓑玖波集　小本　前二冊　後一冊

宗匠大筑波の外歌を撰て附れり自詠の句を案ず俳諧始古の俤あり

誹狂天狗話　一陽翁編　一冊

活〻奮発乃奇異なる話柄を集め小冊なれども此書あるを小俳仙と謂べし

誹諧月雪花四季津鳥　同撰　二冊

此二書は月雪花と四季歌なる者の異名紙巻て注解し末に接句を附す

誹諧遊覧誌　葛郭著　中本二冊

常陸の国の夏を記す法華の化縁を基とし分て古歌古句を附す

誹匠家雅見種　小本　一冊

江戸法流の判者定宗信定を基とし分て遠境の使を乗べ

誹諧麓之杖 俳宗没古年表 水戸素綾撰 一枚摺

蕉翁夜林 孤居句選 三大集云 中本一冊

誹諧千里獨歩 同撰 蕉門傳書 二冊

誹諧二冊子 四世沾山集 發句附合 二冊

古来庵存義句集 圖大撰 四冊

誹諧百福壽 樓川年賀集 三冊

誹諧櫻合せ歌仙 存義一例 獨吟一冊

誹諧四季句帳 浮点者句集 二冊

梅翁宗因發句集 素外輯 一冊

椎本才麿發句集 同上 一冊

芭蕉翁渡唐像 一枚

芭蕉翁鹿島紀行 真跡 一冊

眠柳居士發句集 門瑟撰 二冊

大無發句集 霜後撰 二冊

柿晋問答 其角去来俳談 一冊

雪門判者發句帖 一冊

誹句探六帖 完来撰 初中本二冊

月並發句 ゆしく艸 完来評 一冊

完来發句集 近刻 一冊

月並發句五句合 午心評 一冊

雪阿嘉理 雪門一汎高点集 点譜 木句一冊

繪入句艸帋 同撰 彩色摺 折本 一冊

龜戸奉納發句拔萃 律雪庵評 一冊

律雪社中運十玉發句拔萃 編 六いろ 一冊

得器叟高點五萬句 彷彿の画 一冊

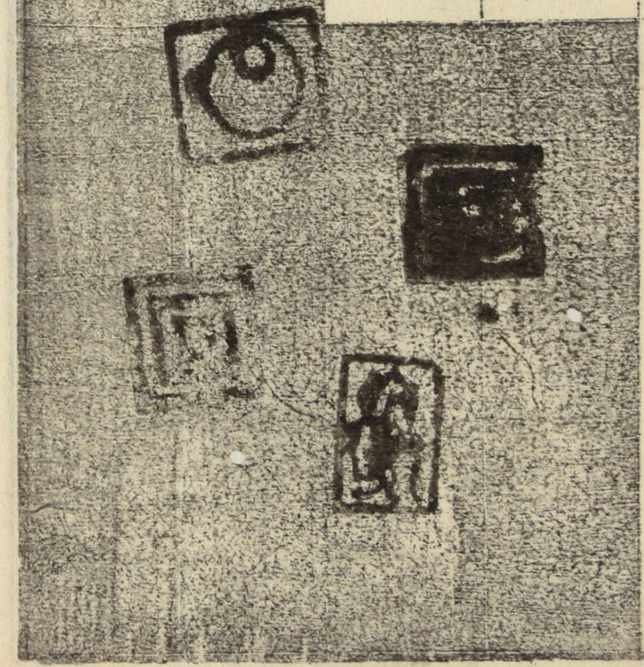
一とせ支山庵社中共に俳諧して武方の風奥ゆかしく侍りしを奥と称する事侍りて忘れ侍りぬ

其角附合句續松（カルタ） 其角撰 両面摺

家晋夜百巡忌に当て茶こうして蓋流れ其角先師付合の秀句を撰ぶ

芭蕉翁甲子紀行 真跡 一冊

誹諧松島紀行 素堂撰



山東遊覽誌 小本 二冊

此書は江の沖漢奈良沢仁素跡を微細に乃後乃小名社寺の縁起事蹟句を附

山東遊覽圖會 北尾紅翠画 近刻

右の書ところどころ黒字宮と文字を追加奥海道の沢温泉場の体を表す

向嶋遊覽 画景硯の水 淺草庵大仏作 拙詠を加へ刻

大川橋より上へ本母寺まで六陵の名所とあり仕まつり遠境の雅客を賦む

日ぐし八景圖繪 北尾紅翠画 ふしき堂一枚

蜀山人先生の狂詩百一首を添ゆ 景地乃小遠国に見るべき図

前句 新堀判者川柳考 公書物編にて當時まで六十七編に及ぶ

高點 誹風柳樽 小本都部 一冊

名づけ流行する事年々新句年々集之出板 本小口 表紙其他 絵或事聞とく

濱藝者中邪

長柄橋
合戦
[illegible]
[illegible]
[illegible]